

浮世機關西洋鑑

初編

上

10

15

20

25

30



初編二冊

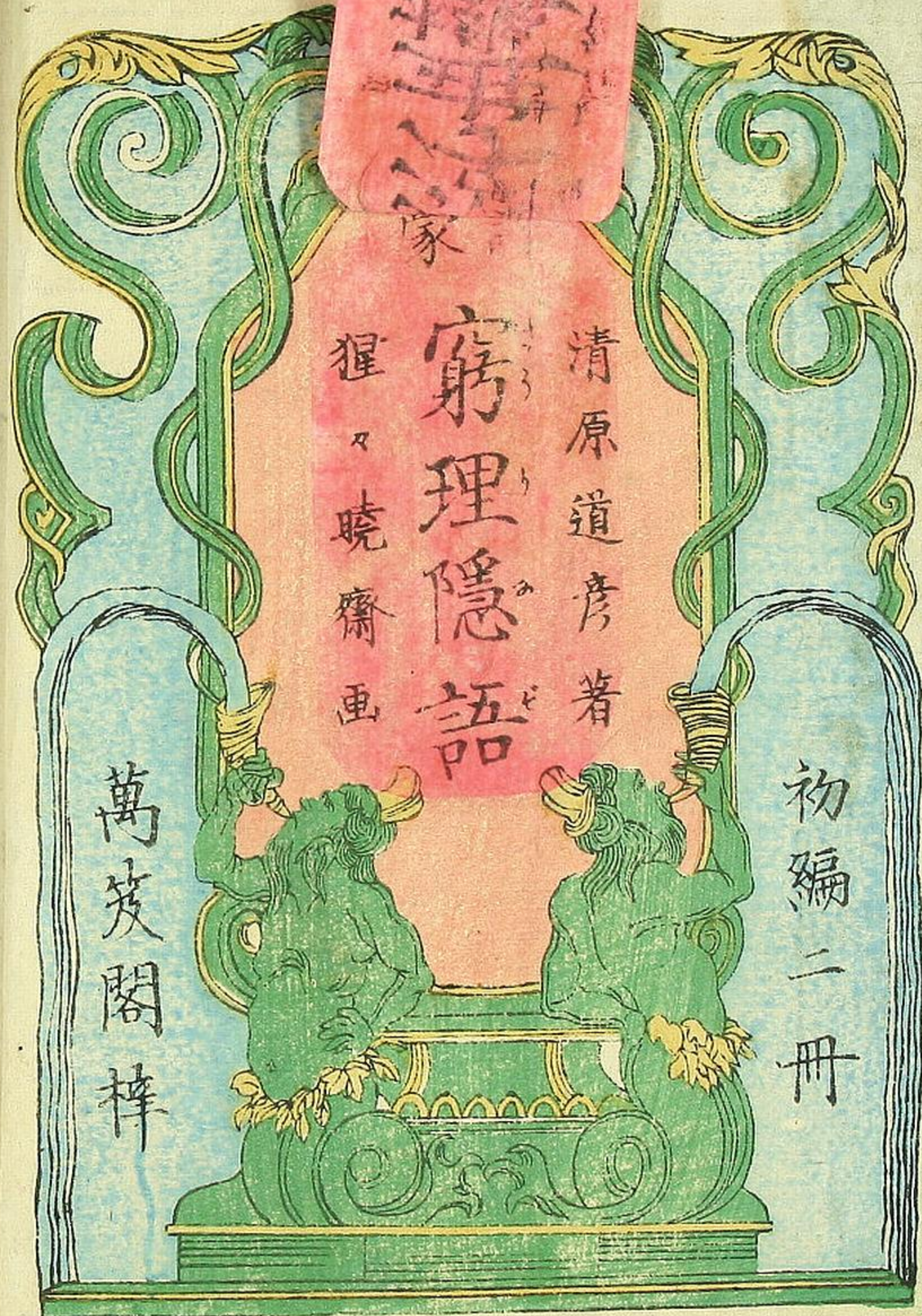
萬笈閣梓

江湖機關西洋鑑初編序

我輩戮力純土方<sup>ニ</sup>備れ、泰山の底<sup>ニ</sup>穿ちて、  
 前世界<sup>ノ</sup>枯骨<sup>ヲ</sup>を顯し、紀元前<sup>ノ</sup>古き<sup>ト</sup>温く、  
 毎日新聞<sup>ニ</sup>備へんと、夫流行<sup>ト</sup>純變換<sup>ハ</sup>最初<sup>ト</sup>、  
 取立<sup>ノ</sup>開辟<sup>ト</sup>を、終<sup>ニ</sup>交際<sup>ト</sup>純段<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>銅版<sup>ノ</sup>の  
 画畧<sup>ヲ</sup>明細<sup>ニ</sup>寫し、歴史家<sup>ノ</sup>演舌<sup>ト</sup>時<sup>ニ</sup>隨<sup>ヒ</sup>此

763

紅紙貼印  
窮理隱語



初編二冊

清原道彦著

窮理隱語

猩々曉齋画

萬笈閣梓

江湖機關西洋鑑初編序

我輩戮力純土方、備れ、泰山の底、成穿も、  
前世界乃枯骨を顯し、紀元前の古きを温く、  
毎日新聞に備へんと、次夫流行純變換ハ、最初  
取立の開辟より、終に交際純段に至る、銅版の  
画畧明細に寫し、歴史家の演舌時に隨ひ、此

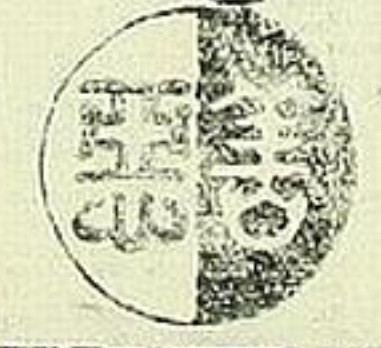
西洋鑑初上

48-8007

機關の糸紙引て、西洋目鏡の變化を著し、先  
贈答合述相互に句次ぎ編成、嗣に發端  
一部に貴眼が止れを、前着官ハ是を御交代

横濱楓橋下地新居小

神奈垣魯文謾題



自叙

開化傳車所より進み、日新橋の新しき昨鳥と  
變流京橋をも、榎端あはれ練化の石造され、山  
鳥の尾張街より西の宮居跡垂し、蛭子乃神の  
赤髻釣も、目今鯨漁の業めや換ふん、白銀座し市  
街さへかの洋銀より席衣奪られ、大根川岸も、鶏の置  
場と轉る、明地の南艮、刺川岸の蛤島原に樓臺

西洋盤刃上

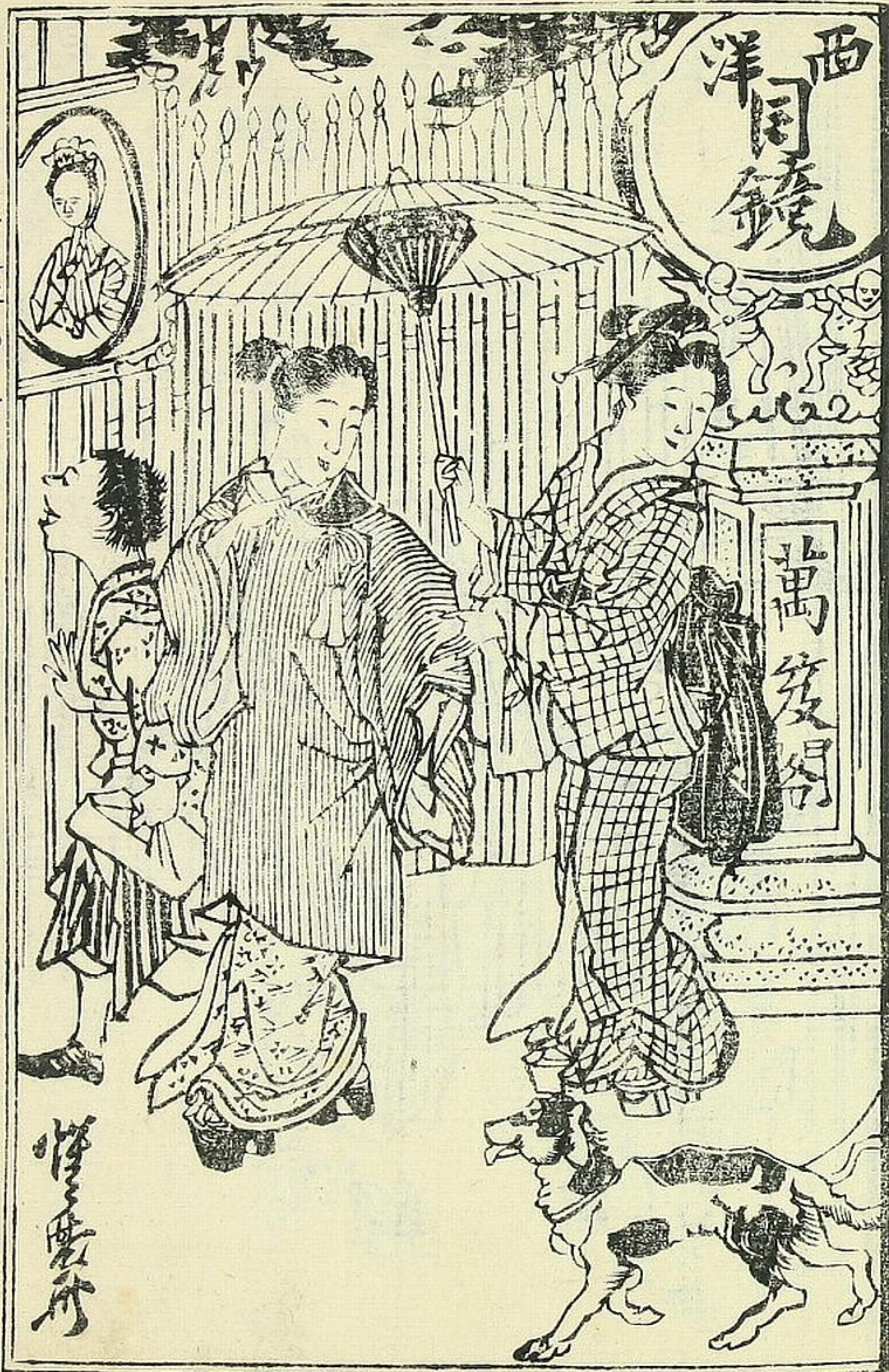
吹くも守田や変な碧海岸日新の地八真事  
 誌の出店よ知られ日本橋は回習ハ之路は梁架り  
 改まり駟馬車の道廣ふして歸路も元の客小  
 河へ渡人方純辻車ハ壹米よ往來の人をす勉左方  
 右方の舞合ハ棗く音々喧々隆盛ハささく書  
 夜夜捨波おれを寫真よ取らばく敬せを佛の  
 那侘亞爾も玻璃衣碎き内田九一も寫玉をを授

ぬん銅版細密ぬれども洩しを盡さ波石版奇功  
 ちゆれども争り真正我摸得ん此景况波硯の湖浮世  
 目鏡よ先見の賣トとも危うい拙著筆頭よ探る  
 機関も作者が胸中の遺操よ一段二段無理三段  
 やつと脱稿を長らく斯の如く小候也

明治六年第十月

岡 史紀述

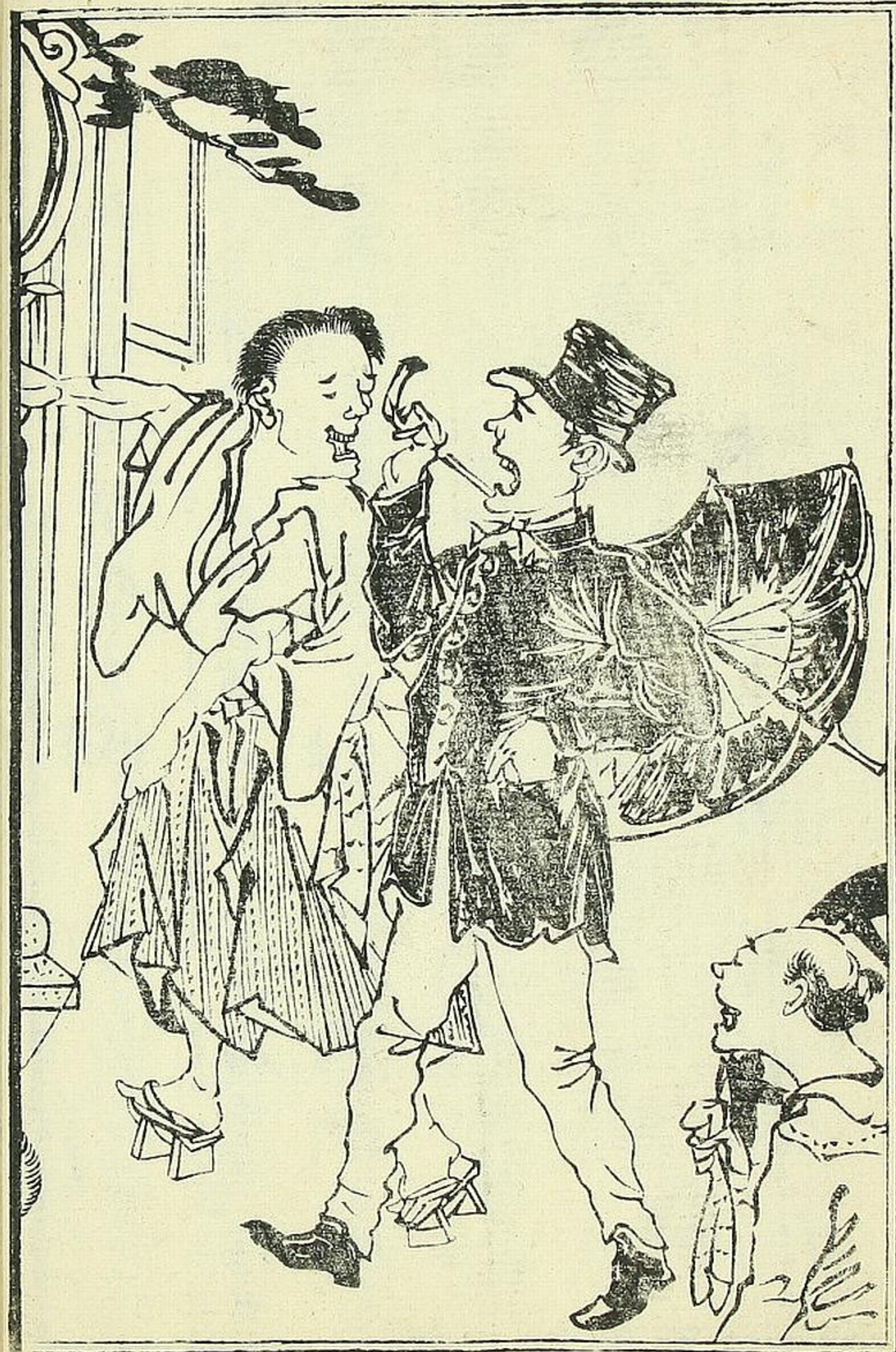




西洋鏡

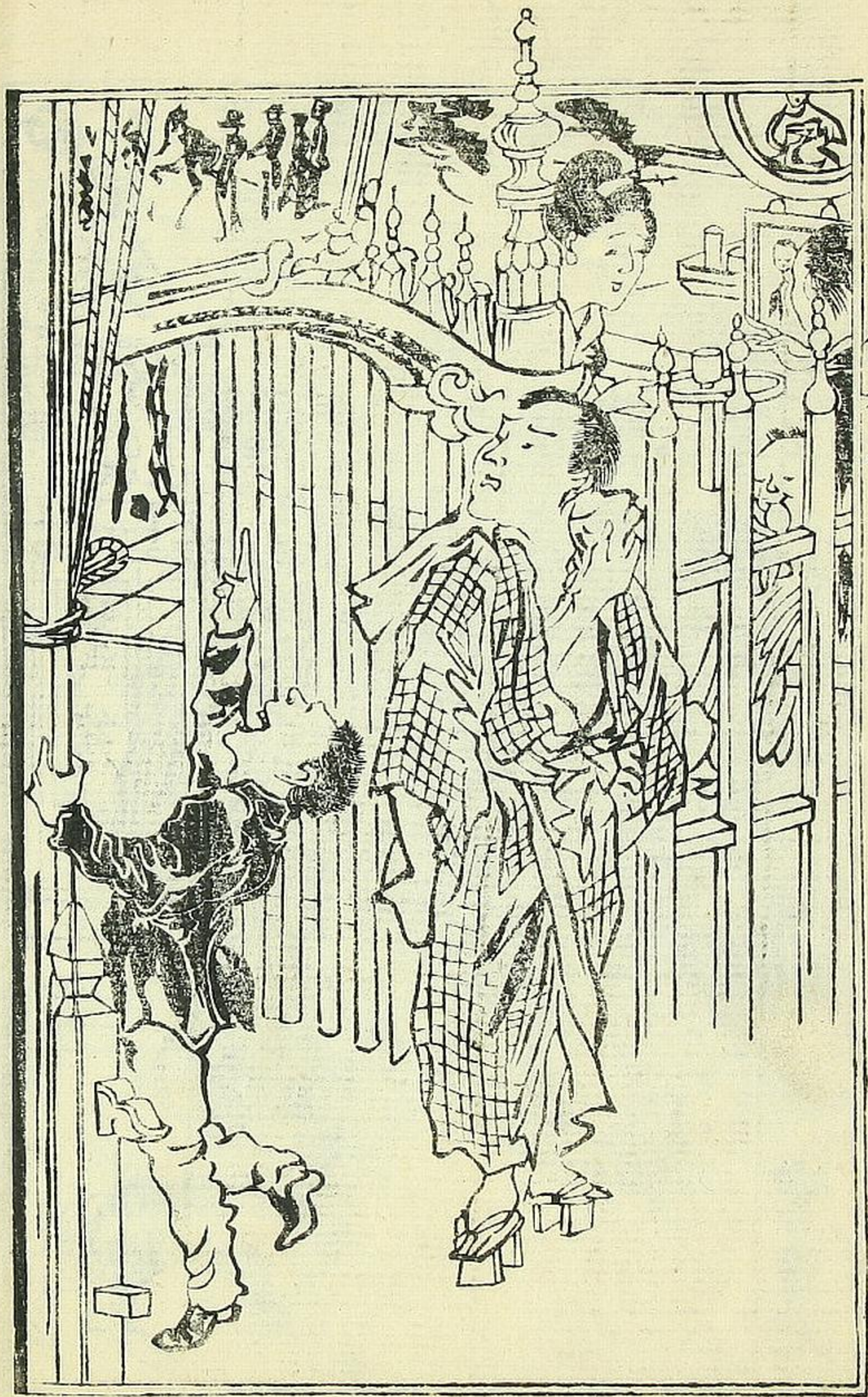
四

惟慶所



西洋鏡

三



江湖機關西洋鑑初編上

横湾

岡 丈紀著述  
神奈垣魯文校合

虚言で撰る經紀商の弁舌

「オイ生七さんね、ハあの市時世は何様さう忙然と  
しとわなさるのぞ初めのと何ぞ失敗を干分が私  
あんぞへ毎朝野毛山の六時があんと鳴て朝運動の  
馬車の暮ぐさとりくまるぐのるや高波の毒をで先

横濱東京とをよめ大坂うら新長崎のりやよ及なび  
 新函館札幌の開墾地をどうも宛へ入るのハ  
 りのぞもステーション  
電氣車のよ七時の流車が為附分サ  
のり場あり  
 そとをまご警くところ毎日の必布告く横濱と東京  
 の新聞を流くばよむとかのひるまのその勉強といふ  
 のハ我必あがるも必るべし一週後三月をうけつるの  
 新築のモ成洋学先生小依頼してエービーシーの警古と  
 叔延とみて始めとせうらうグセーとよののさの時ハあれ

教授者のまうととらあきダ味店の振替ごといふ  
 ところまうくとよめるやうはあ内とのダ不な様さ子を  
 らせよとの考へよ高法のやもうびに居て勉強さ  
 へまれば仕度利潤はまきひる一サマアくあがらふりふ  
 こと一あんぞいけち地一是うけの年住居るあるが今  
 まを大振銭しとらもあく大高質と肩とあくと  
 ぞうありかうあり押まのまところう張らうが子ま  
 とに湖上の小量集焼があのせつるやと演が不係



どの神やぐ大系どのことよのりあんの象元心業  
 井のうちの種サ能目も中通の番風亭でそれ和田  
 源の西洋料理、彼処で第一食車でなくついでに  
 さまざま洋藏と銀多湯よ出合てりくろく活のうち  
 彼奴等のいふよけあ系を内長よ向つて、其のやう  
 各方向不見の商法をよ各が、世の東傳愛国志を  
 山ぐ電線の綱とてり張まるやうなるめんどう風情張  
 あさやうがよろらうとぬう、くろく燕雀さんぞ大勝り

まらち成るらんや高法よりめて、自負しやアあのが那破  
 番と華盛頓張合候、く自に、くろく百戦百勝の利  
 ハ物中よありサとくろくで甲鉄船よ、あさよ、あさ  
 亞米、くろく、くろく、二万弗の、品物張、四厘日分の失算  
 もいふむ、一財系、どの、どの、どの、どの、どの、どの、  
 持とる、くろく、一寸、二寸、井の、利潤、あり、サ、ナ、ト、ぬ、あ、を  
 ハ、くろく、くろく、と、遠、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 出、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

野ののりるのうまよ疵サ暫付高橋の流連や估  
野の富貴採の藝技費成廢一と一は欺され  
ととるつと一月をうり横敷一ととるまの勉活まりやア  
まるをど高法の功が後で俵物系文の居申よアあ  
が天うろ措幣があるやうサその附よア之井の又措  
造我暇かよえあろ一と國を運送のあふれ一と  
大抄の総括とまるの毛ととを自中の指ととやア  
此後と一とが更合流文へ此券印紙を強括て一と

一とと垂てもふ細かサあ一は横濱や神戶がととて一  
生涯腰成居るやうな小量な總生よア途由各國の  
大商賣と有城あんと一平均一貿易と考ふ  
むつりの免角人よと勝牌の巨大が肝要サははあ  
ゴア及をあのまてとち平海で新流しとと湯を火  
器よ煙で地球成まらう一と一と遊ぶ量見て居るのサ  
は友の又高法で大戲場がらう一とととそれと元傍と  
一と自うろ飛脚船と遠と上流うろ番港大東洋と航



伴笑



長鹿の香  
踏入る  
はる  
あゆ  
あゆ  
岡丈紀

海うみて桑ま波なみ蘭らん西せい士し哥か紐きゆう約やく克かく倫りん敦とん巴ぱ勒らくの諸しよ港かうをまと  
 一い何なにでも世せ界かいをま一いち高かう法ぽうの丈だけ棟とう梁りやうよまるつつのりりサさナなニにけけハハ  
 よんよんぞぞままああの用ようがまああのま今いま出でるるううららううままのの明めい月げつ暮ぼの  
 ととそそううとと何なにももへへののごご子こへへ丈だけ際さいままのの村むら田たのの屋や席せきを  
 ささももああけけののややアア湾わん正せい公こうのの地ち内ないをを揚よう子しイイヤヤぶぶのの國こくツツ  
 一いののごごナなセせ日にっ本ぽん人にんハハ初しよ懶らん惰たととせせがが失しぬぬくくああるるんん家かよよ  
 軟えん息そくくくオオヤヤ今いまのの産さんままのの附つごごとと生せい物ぶつ附つ牛ぎゆうのの体たい息そくをを  
 八は雲うん屋や 弁べん天てんのの附つ牛ぎゆう屋やよよ食しょく案あん中ちゆうごごうう急きゆう南なん附つ法ぽうをを一いちととああるる

ねねんんナナニニハハ一いち十じゆ日にちごととととそそららややアア六ろく交かうとと直ちやくううらら右みぎのの相あひ所ところ  
 屋や人にんのの綿わた羊やうのの分ぶん一いちでももああるるぬぬららねねんんととままのの家かのの  
 元げん天てん窓まどがが店みせををのの僅わずか促せうごご眼め玉たまががセせコこンドンドののややううああるるハハ  
 アア七しち五ご成じやうああららとと今いまううらら政せい痛いたくくらら来きまま大だい高かう法ぽうのの下したごご  
 ろろのの藏くら法ぽう界かいががああるるソソレレササテテ内うち薬くすりをを揚ようとと一いちややうう  
 一いちととああるる

青世操せいせうとと野の幫ぼう間かんのの禮らい言げん

イイヤヤああままのの久ひさうう招まう教きやう紙しははままををぬぬぐぐのの毛けはは壯さう健けんいいうう

一々々々 せ給ふおかしき山まゝ山と山めづりといふ  
 世家の子目今山肉の形勢ハ水糸屋の流れハ  
 くとあつた元の水糸屋はつとまて陽曆以降の系況ハ  
 強嘆嘆のうぢりでゲス 後番ハいざんと知らまゝなり  
 新居の夏番魚をまよひまんと飲まるとなる東海  
 迫り雲弁ハ命トあるひと仲を交の先波の辰辰一  
 鶴の舌流流々々 而方流流流々々 一 身ハ接乃至ハ氷  
 月身ハ糸の平肉の利量成たのまややくみてるの

枕ハ密成かりこのでゲスが番附をスリハ開化ハ  
 オーライとのハ洋流がゆいまゝとちよんとえのよき  
 楮幣 之等よハ分てあぢりもステーションの札賣の  
 でケスうう中ゆも目的のハ附る成とむ寄ハる  
 の流流川流ハ一汗流あが 今云流が程まらやア  
 りどるハ一度ハいさむとあるまんとあつてびく  
 霧が流るハ其さうんあつと驚くよたんろス○ヘイ  
 あの新酒屋の別取子かまハ是ハ是ハ是ハ是ハ中

ので松本の活本偶さうやうサナラくたのしく美奴も  
 ゴウせんぐ一寸世話場の幕へ中二階の白面がを  
 出さきさうで向上面成唱衆とのいせさきせのるでゲ  
 スそまよりい今度仁王門の奥よりたる方よりさ  
 場のおよと相参しと奇ある婦人の出現しこの後  
 以後トさうさんとさ時のお舟の紫若若葉三舟まふじ  
 の教條ざんきう推サモシおれ是さう家も紙は後トさういふ紙あが  
 れと入付代を洒落ささうでゲス僕が叱々々々文指

色の文宿更し後トさ若干の月令紙あめとのる  
 ささの機あま死久しうて懐中が忍もささちとさ  
 雄乃きと氣味命よあふさわささう若の附ふ房さうと  
 ひとども教えん成さああ成さうゲスそのあつりみわア婦人  
 偶あ更のささう本分の勢間紙附ざん廢しと若とさ  
 立の控紙けん保ちやスタトあつりゆる解放か後ごの形勢一  
 覽らんよ花街くは進しん敷ささると久そまよアや何さう  
 月給げのさささまらサ等外附ふ属ぞくの身み上う子こ実じハさ

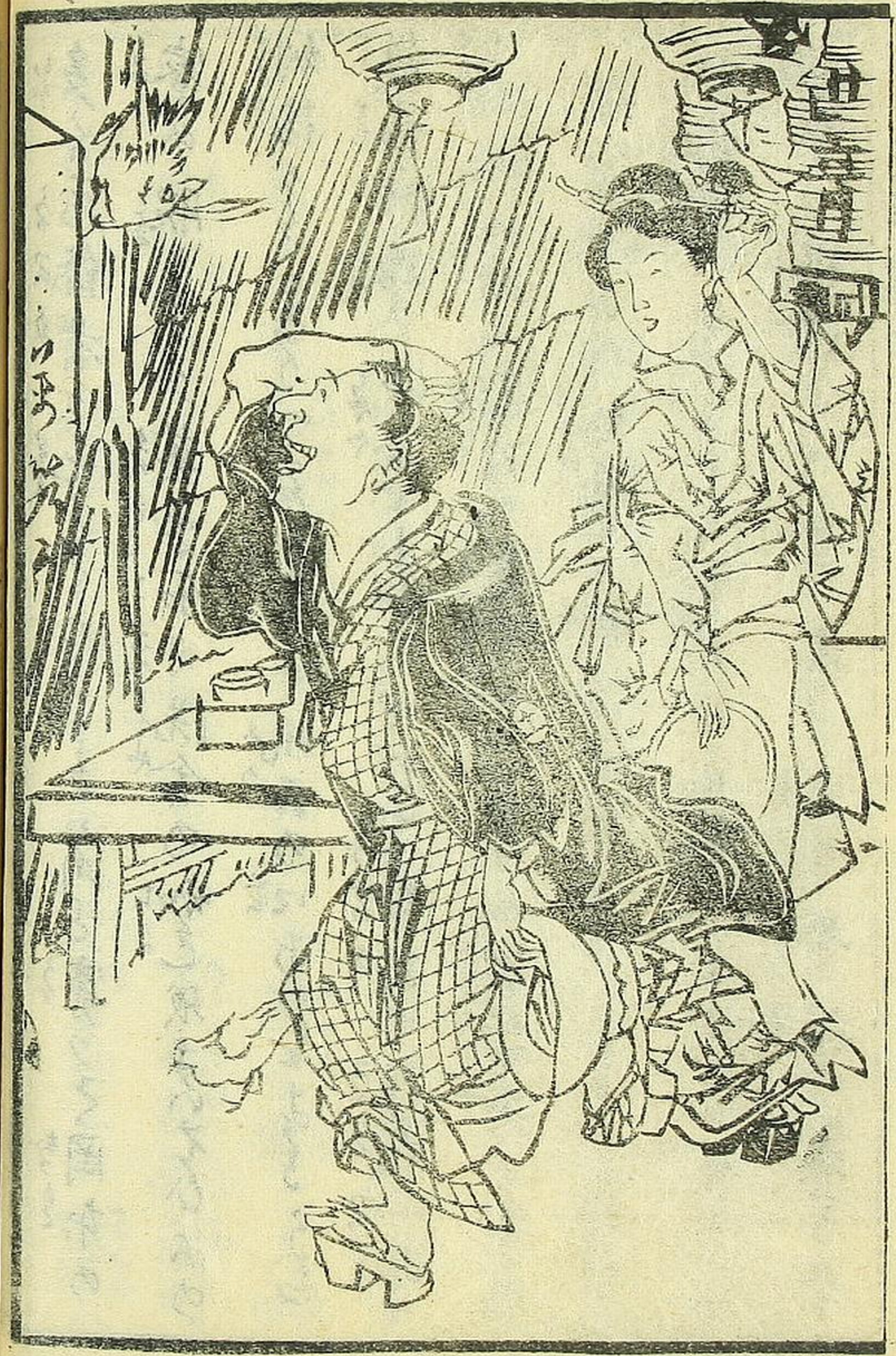
方が會社に關係するところの社收斜りありはサ  
 一、其感もその所分が有りやまう、水産の習志  
 紙書に在り、五中島の英官紙がラスどりみこと  
 鄭肉もき土着といふ、勢向ハ、さう、ゲス、今、今、ま  
 よ、出、港、と、その、や、ア、ち、の、早、ま、だ、の、思、海、門、  
 が、そ、ま、よ、と、を、屋、法、の、間、を、何、れ、例、の、富、士、家、う、六  
 々の、回、線、成、ま、の、所、け、の、中、に、く、そ、く、の、中、に、  
 紙、横、よ、と、く、水、産、局、の、制、稿、と、い、ふ、所、に、ま、だ、  
 被、迎、ハ

多く者練者が屯一と、わ、う、う、う、う、と、穿、つ、と、岡、本、の  
 寮の、腕、う、う、が、英、学、而、日、洗、舎、の、知、色、紙、ま、の、を、ひ、ま、の  
 制、稿、う、う、と、ま、り、づ、と、い、金、子、で、風、呂、の、に、あ、け、を、ま、さ、う、う、ち  
 後、部、紙、紙、と、柔、屋、と、ま、い、あ、げ、の、先、登、校、の、徑、邊、一、等、  
 官、一、組、に、紙、の、着、紙、を、廢、業、どう、や、う、を、男、登、考、と、ま、を  
 一、組、ナ、ン、ト、ま、の、紙、向、と、測、隱、ま、ち、よ、ア、ゴ、ウ、セ、ん、う、〇、エ、  
 初、對、面、の、方、一、ライ、ハ、紙、免、と、お、り、一、や、る、う、穿、つ、と、  
 宜、多、り、紙、得、と、可、多、り、あ、る、よ、う、登、樓、の、第、一、  
 一、三



大徳大徳大徳

大徳大徳大徳



大徳大徳大徳

大徳大徳大徳





南洲の学風も一変して正則がさうらう吾輩の  
のりとも收束するさうさあう世間の懶惰先生が  
文典一扱よやき一年のつこの會活一冊よやき半年  
うつこのとイヤハヤ笑止せんぞん不勉強さうらう免  
かくはあつての明の附よつてあつて光陰を  
空しく費すもの家よ文部よ附して大飛くトキふ  
何れは勉強う子〇ナニ米國史をよむとイヤまのまのく  
はよまゝのことであつくとて由吾輩あとのふりやく

及ふところよあうは嘆嘆くそのる由或高貴が僕  
の寓居よ来つて曰くあんやも先生あの附勢よのまら  
高法をまるめられの騰價とうまの高價とよ松岡  
のたりるさうらの英語紙とよねと一万ふかふ人よ  
怪儀をうけく大業とあうねとのめく僕よ大懸願  
英學の教授紙托しやう後世あそるべし  
いさまるねさを先例の松本の會活第一本と  
投し入門謝儀と圓金三急とせしめらうサと





七五七

徳政



横濱の  
 新編  
 徳政  
 外史

徳政

聖國あるも世の交際のながくはるあつたうちざりま  
 かの仕士が惣金よろしく遠船終は或偶家へ登樓よ  
 及んとさるる所謂研とある業はあつた白鳥の徳  
 利交代あげく冥冥のボットル返くはあつたびいや  
 ハヤ日本酒とビールを混交しおひこのぶくろ 沅研  
 碓打路と道とをまされらと彼等へとりあふるよ友味  
 つましくふき置置中へ国房へも運入つたをさうろ  
 後と白川夜船さて翌朝よいのく櫃子くう後と

朝月が面上成窓まのを愕然とくおどろき花を床  
 極よくけと六角時斗をうるとえお七冊之十分サよの  
 相殺よ命とくかの連を死させよかとと怪むと  
 かまの今朝未羽拂曉はゆつさといふのを心中大い  
 激しき彼ら僕の囊中をこのと僕ら彼らの囊中  
 と針つと原中成おのを罪を互よけり茲が立憲編  
 まりのあり失得を最善の試練ありとどつと撰紙  
 看付く此紙の會中書紙よりまををえるとビールの價が

一國之方場代は合料にて一國のありとも存外の敷  
 取と必怖いしその弱く成せりと平面で今や  
 とありつこののサア國もまののの囊中よりうオ  
 ブースリーセント 英海軍一才と ちうりやうう進退若つ  
 と然るに地は居る富と足暗る者ありの  
 居残る處せうろののあり遺憾のいりとも若者類  
 唯つりて速成先之仰しその成云がう大波瀾よ及ん  
 ぶが一作長所不定の一書生は速ふしと拵んぶのぶ

僕の失錯ありまも若者もあつく條理成云ふて  
 僕が暴動の所為をもあつと 羅華の若人成速と  
 まそうを形相で既よ不寝番成に所へと句をいせ  
 さうを勢ひごうう今いふや是まをありと摘と成せ  
 張投附飛路伏しと田町をの知己のう入令策の羽  
 撥を莊中と朋友よまゝ一筆海濱りのあるのが来  
 このであれも途もむさううぬと策と入て附馬  
 とまを流垂しあれ張連と富長庚とことろが

元来空をあくは終る一切僕の什物を引直は春の骨  
 董屋を六園二方うて先又園を引直は春の骨  
 を久しくホット一息突くわるところへ横町の牛舎を  
 二方行とていふ書どが引直は春の骨も彼見とむけうく  
 りふう先引直の引直は春の骨も彼見とむけうく  
 一園の引直は春の骨も彼見とむけうく  
 債が二株一株拂ひつくと二かものところね又園  
 突は且夕の生活もあまる石は及んでテそそそ

年の交際はおまへ年うよと海軍下等の共費をいと  
 りお君成引直は春の骨も彼見とむけうく  
 美人は初色はりとさうしとやと小使りホーイの  
 傭は紙探案してりふつりてが勿論海軍下等の共費をいと  
 の第ごうう食まよとれは決して月給よのぞきま  
 自ぜんはむが急ぐあうねと迫は汗顔のりうだが  
 止紙はむ貴家よ食まよとれは決して月給よのぞきま  
 あうねとてく國通を例のりうがまんどの事件ハ

失落中の失落書一巻より始末を  
知りて其の旨を早に周旋致すのむく

江湖機關西洋鑑初編上巻終

010190523034



